

孤獨

美知代

校庭の花壇に、炎えるやうなつゝちが咲きました。

竹の圍ひに倚つて、きぬ子さんは又しよんぼりとつゝちに凝視つてをりました。

凝視つたきぬ子さんの大きな碧い眸には、泉のやうに涙が湧いてをりました。

ホツと、眞つ紅な唇から溜息が洩れました。

午後の日に映へて、きぬ子さんの金髪はキラ／＼と輝きました。

「高岡さん、……さびしい心をお持ちになつてはいけません。」

やさしい言葉と共に、何時か背部に行らした小峰先生の細そりとした手が、きぬ子さんの肩に掛りました。

きぬ子さんは懐しさうに小峰先生を見上げました。

「……………」

それと一緒に堪へ得ぬやうに、きぬ子さんの、薄いそばかすの頬に涙が流れました。

——可憐いさうなきぬ子さん。

幼い時に別れたきぬ子さんのお父さんは日本人ではありませんでした。きぬ子さんは混血兒であつたのです。

きぬ子さんはお母さんと唯二人、わびしくその日を送つてをりました。やがてきぬ子さんは學校へ通ひ始めました。

けれどもそれと共に、きぬ子さんには深い悲哀が興へられました。それは、混血兒と云ふ汚名でありました。



『混血児。々々々』

誰れも彼れもがさう言つて、きぬ子さんを別物扱ひにいたしました。誰れ一人きぬ子さんのお友達にならうと云ふ者もありませんでした。

孤獨！ それほどんばに情ない心持であつたでせう。

涙多いきぬ子さんを、眞底から慰める人が出来ました。それは先頃行らした小峰先生であつたのです。小峰先生はほんとに、きぬ子さんに同情し、きぬ子さんを慰めました。小峰先生のお蔭できぬ子さんは漸く、一道の光明をさへ感じるやうになつたのでした。

悲しい運命の子！…それほどこまでも悲哀にとらはれればなりませんでした。

僅かの患ひに小峰先生が再び歸りまさぬ旅に就かれて終つたのですもの。…

孤獨！ 噫、…

又もや孤獨の涙を抱きながら、きぬ子さんは、土曜日と云ふと小峰先生のお墓へ廻るのであります。